

第122図 T14～T18 トレンチ配置図 (S=1/1500)

なお、第88畧状区間と第89畧状区間の外側列石線を延長し「折」を復元すると内角は129°を測る。

#### サブトレンチ 2

T 8 から東へ約11m離れた位置には、長さ 5 m前後の石列が確認されたためサブトレンチ 2 を設定した。検出された遺構は地山上に約 3 段からなる石垣が築かれており、背面には石垣の石尻周辺に裏込石が充填されていた。石垣の勾配は約72°を測り、積み様や形状から砂防石垣と判断される。

#### T 10 (第121図参照)

T 10は第87畧状区間に位置する。T 9 で検出された外側列石線からの延長を予測しつつ、砂防段の改変を受けていない尾根の稜線上にT 10を設定した。

遺構・遺物は検出されなかったが、表土のほぼ直下から地山が検出され勾配は約34°を測る。T 10 から第83畧状区間までは砂防段や、谷部に幾条もの石垣が構築されており、かつての土砂流出が膨大であった事を窺わせると共に、現状から城壁の痕跡を追求する事は困難を極め、将来的に課題を残している。

#### T 14 (第123・124図参照)

T14は第78畧状区間に位置する。トレンチより北西側には長さ13mに及ぶ土塁残痕の高まり（第80～81畧状区間）が残存し、頂部周辺には内側列石等の石材が散在している。城壁の一部を構成するこれらの遺構が尾根上に築造されているため、城内側の遊歩道から見上げると、一見、夾築式の城壁と見紛うようであるが、あくまでも自然地形を利用した立地となっている。

周辺地形は花崗岩の露頭が著しく傾斜変換線よりも城外側は急崖か、もしくは断崖となり非常に峻険な地形である。推測される城壁線には露岩の間隙を縫って敷石らしい石材の一部が露出しており、遺構の確認と共に断崖部分における城壁構造を把握するためT14を設定した。

検出された遺構は内側敷石と造成土である。トレンチより城外側は高さ 2 m以上の断崖であり、この断崖面から約 5 m離れた城内側には幅1.7m、深さ45cmを測る落ち込みを検出した。内部は造成土により埋められ、各層厚は 6～15cmを測り層内には硬く締まる層（4、5、7、9層）や、炭粒を多く包含する 6層もあり、この造成面に内側敷石が配置されていた。

規模は城壁を構成する各種の遺構が乏しいため判断材料に欠くが、自然岩盤を天然の壁面とし、内側敷石までを計測すると城壁幅は5.6m、高さ3.1m以上と考えられる。

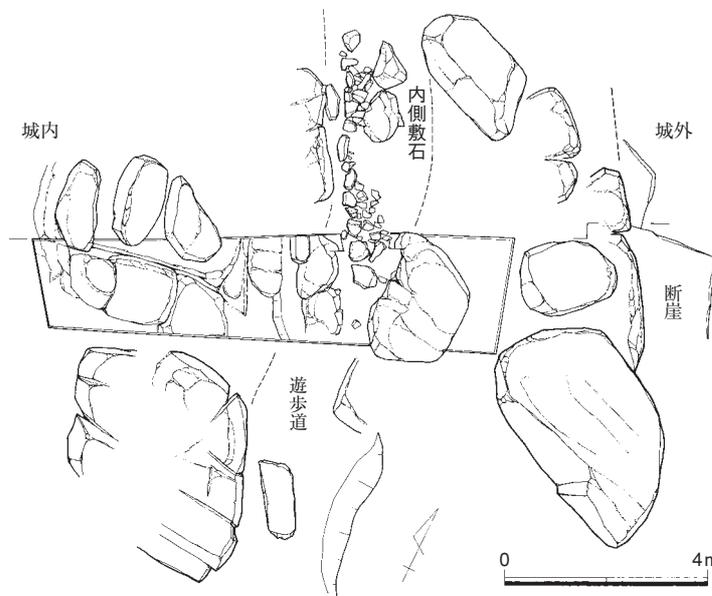
#### 内側敷石

内側敷石は露岩との狭隘な間隙に配置され、長さ5.1m、幅70cmを測る。内側敷石の端部は城内側に石面を揃えており、30cm前後の小石材が多用されている。石材は54石を数え材質は花崗岩 1、アブライト53であり、いずれも粗悪である。

#### T 15・T 16 (第126図参照)

T15は第77畧状区間の頭部に位置する。当区間は花崗岩の露頭が顕著で傾斜変換線以下の斜面は血吸川へ至る急崖となっている。踏査の際、断崖となる岩盤上に外側列石らしい石材の並びを確認したためT15を設定して遺構を確認すると共に、外側列石との直交方向へT16を併設した。

T15から検出された遺構は外側列石と下部の造成土である。外側列石は長さ13mに及ぶ露岩上に位置し検出長6.3mを測る。外側列石はいずれも城外側へ石面を合わせているが、経年変化により全てズレを生じ前方へと傾斜していた。また、サブトレンチにより外側列石の下部にはわずかながら造成土（3～5層）を確認した。石材は 6 石を数え材質は花崗岩である。

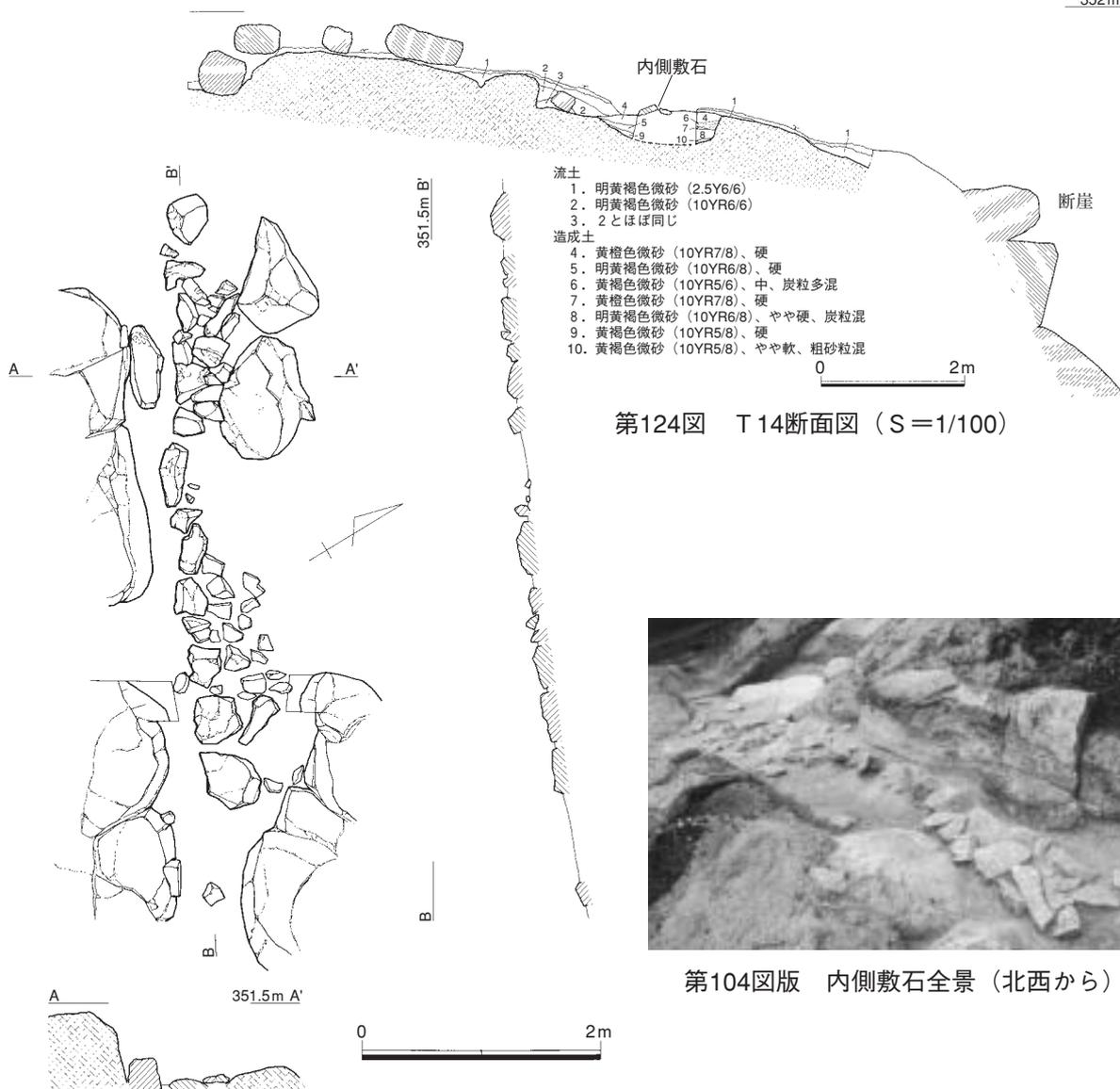


第123図 T14平面図 (S=1/150)



第103図版 T14全景 (南から)

352m



第124図 T14断面図 (S=1/100)



第104図版 内側敷石全景 (北西から)

第125図 内側敷石平・断面図 (S=1/60)

外側列石は原位置からさほど移動していないと考えられるが、他に連続する列石も認められず、自然岩盤と錯綜するなか当所へのみ部分的な配置に留まった可能性がある。そして、鬼ノ城北側（概ね第69～83罫状区間）の城壁線では当所の外側列石が初例となり、峻険な自然地形を利用しつつも城壁としての体裁を整え、城壁化を図ろうとする状況が窺えるのである。

T16から検出された遺構は、土壙1・2と土壙2の上面から須恵器甕（28）を検出した。T16の断面によると、まずトレンチの下位には高さ2m以上の断崖が切り立ち、この断崖上に外側列石が配置されている。列石の背後には転石がまとまっているが人為的な痕跡は見出しがたく転石の露頭と考えられる。なお傾斜変換線から外側列石までの地山の勾配は概ね16°を測り、反対に城内側へは約10°のゆるやかな勾配となっている。T16はT14と同様に自然地形を利用した構造と考えられ、外側列石から傾斜変換線までを計測すれば幅約8.3m、高さ2.1mを測り、概ねこの位置に城壁を推定できる。

#### 土壙1

土壙1の形状は隅丸方形に近く長さ130cm、深さ22cmを測り、底部は平坦に仕上げられている。2～4層の埋土はいずれも締まりのない砂質土であり、内側柱穴の掘形埋土とは異質である。

#### 土壙2

土壙2は土壙1の南に位置する。不整形な形状で長さ3m、幅2m、深さ65cmを測り、底部は起伏があり一定していない。土壙の埋土は傾斜変換線から城内側にかけて緩やかに傾斜して埋められており、特に1～2層（第130図）は硬く締まっていた。また、埋土上面からは小礫や長さ0.5～1mもの石材が散在しており、これらの石材に混在して須恵器甕（28）片が出土した。土壙2は形状や埋土の状態から自然地形の窪みを人為的に埋没させた遺構と考えられ、古代山城期に比定される。

#### T17（第131図参照）

T17は第75罫状区間の尾部に位置する。昭和53年の調査時には第73・74罫状区間において土壘残痕の高まりが確認されており、現在でもこの高まりに内側列石等の石材が散在している。

踏査の際、土壘の残痕はわずかな高まりとして第75罫状区間の尾部まで連続し、やがて消失する状況が把握できた。そのためこの部位における城壁の接続状況と、規模を確認するためT17を設定した。

遺構はトレンチの上位より石列と盛土を検出した。傾斜変換線よりも城外側の斜面は27°の勾配で、表土のほぼ直下が地山となり、外側列石に伴う地山整形痕などは検出されなかった。

一方、傾斜変換線よりも城内側には地山を掘り窪めた幅1.25m、深さ30cmの落ち込みがあり、上位に4～8層の盛土を検出した。各層は10～20cmを測り、層中には細砂や粗砂が混入する4・6層、炭粒を包含する8層があり、全体的に硬く締まっていた。

傾斜変換線付近には長さ1.9mを測る石列を検出したが、規則性はなく遺構の性格を明らかにしがたい。なお石列の石材は9石を数え、全て花崗岩である。

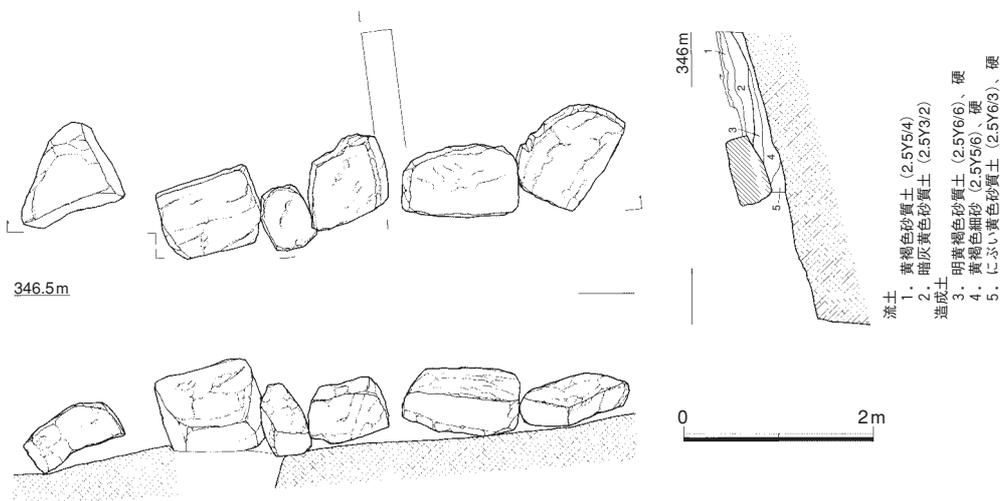
#### T18（第132図参照）

T18は第72罫状区間に位置する。鬼ノ城の北東隅を形成する通称第2展望台（突出部）から城壁線は北西方向へと連続し、約50m離れた位置に土壘残痕の高まりが視認できる。この間の接続状況と、尾根の頂部に平坦面を確認したためT18を設定した。

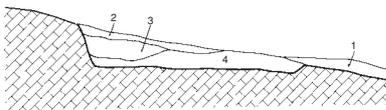
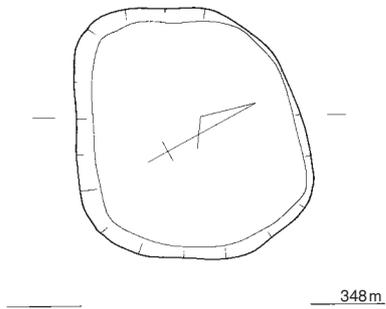
遺構は土壙2、ピット2、たわみが検出され、包含層や土壙2から弥生後期の土器片、並びに不明鉄器が出土した。傾斜変換線よりも城外側には砂防段が形成され、堆積土は腐植土等を含み全体的に締まりがない新しい堆積であり、そのほとんどが砂防の造成土と考えられる。



第126図 T15・16平・断面図 (S=1/150)

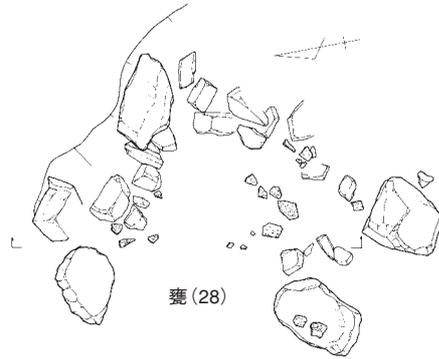


第127図 T15外側列石 平・立・断面図 (S=1/80)

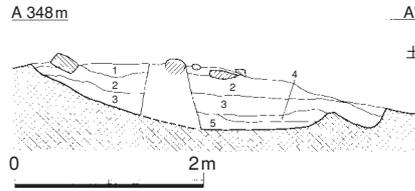


- 流土  
1. 褐灰色土 (10YR6/1)、軟
- 土壌1埋土  
2. 明黄褐色粗砂 (10YR7/6)、中  
3. 灰オリーブ色砂質土 (5Y6/2)、軟  
4. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/1)、中

第128図 土壌1 平・断面図 (S=1/40)



第129図 土壌2 上面 須恵器出土状況 平・断面図 (S=1/40)



- 土壌2埋土  
1. 明黄褐色砂質土 (10YR6/6)、硬  
2. にぶい黄橙色細砂 (10YR6/4)、硬  
3. にぶい黄橙色細砂 (10YR6/2)、やや軟  
4. 黄橙色微砂 (10YR7/8)  
5. 明黄褐色微砂 (10YR6/8)、白色粒混

第130図 土壌2 断面図 (S=1/80)



第105図版 T15外側列石 (北東から)



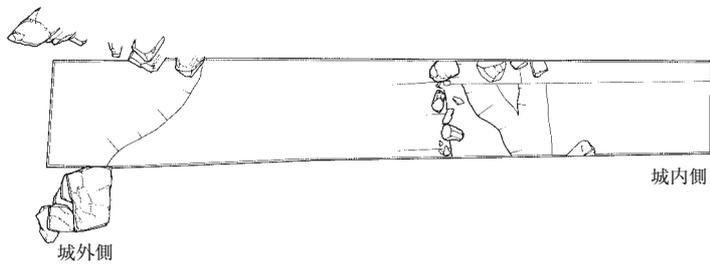
第106図版 T16全景 (北から)



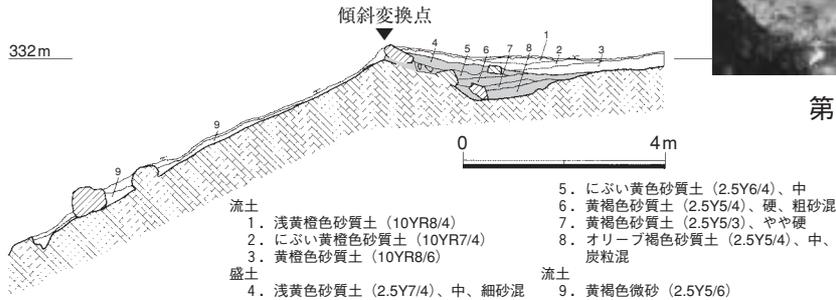
第107図版 T16全景 (南から)



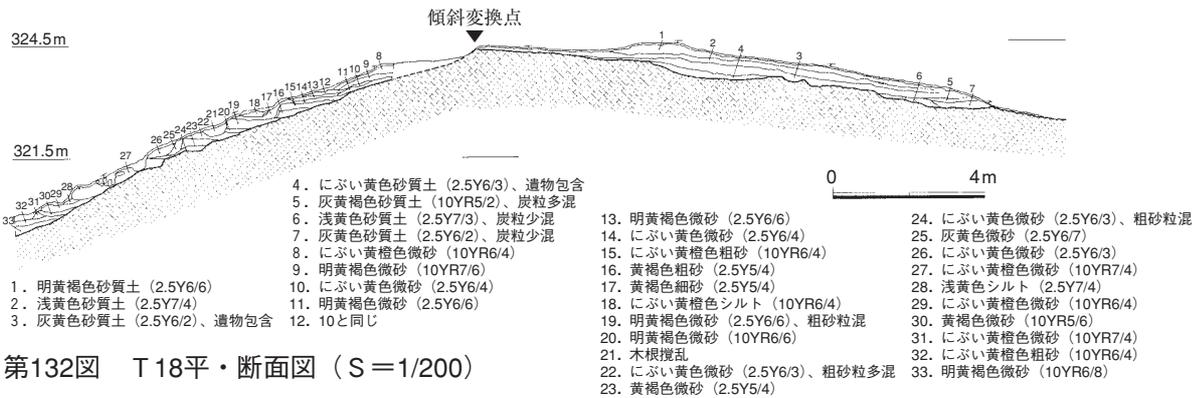
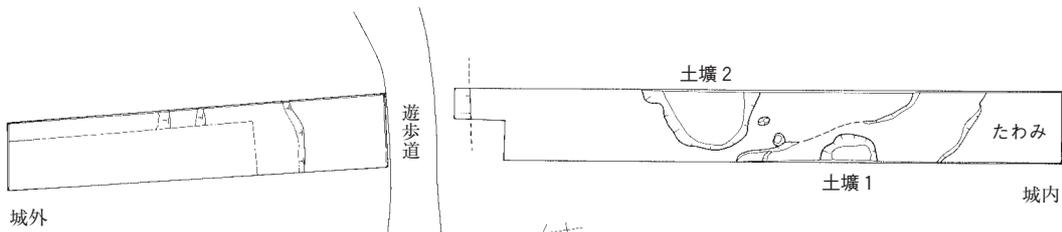
第108図版 遺物出土状況 (東から)



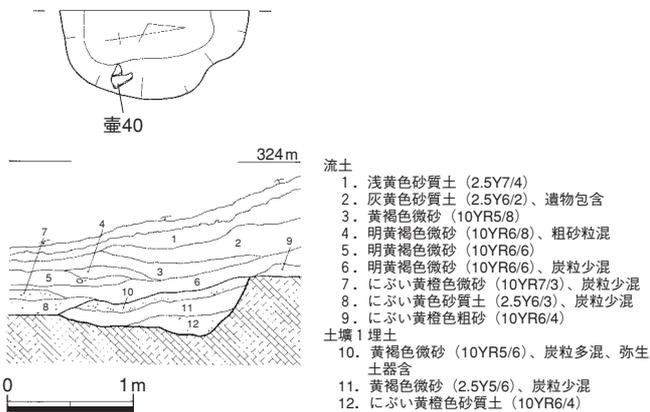
第109図版 T17 (東から)



第131図 T17平・断面図 (S=1/150)



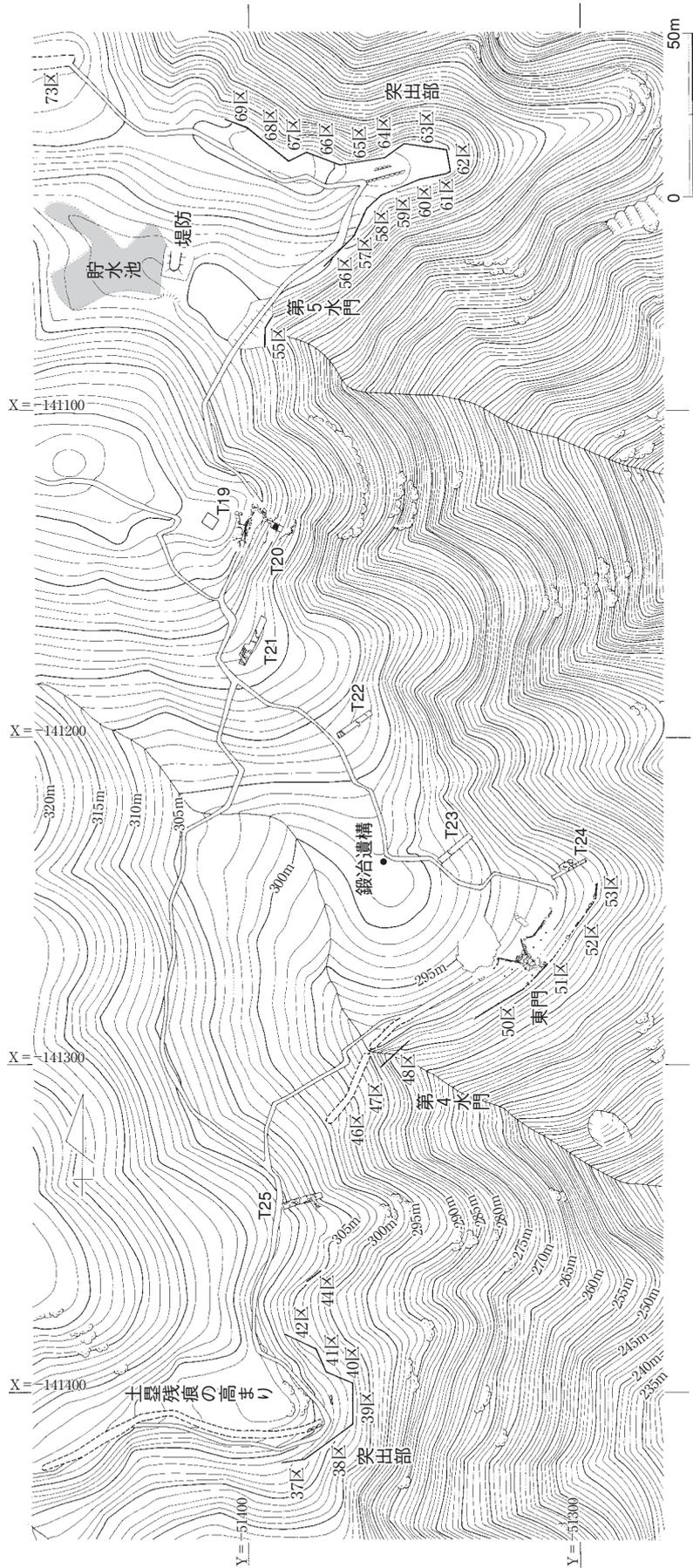
第132図 T18平・断面図 (S=1/200)



第133図 土壌1平・断面図 (S=1/60)



第110図版 T18全景 (南から)



第134図 T19～T25トレンチ配置図 (S=1/2000)

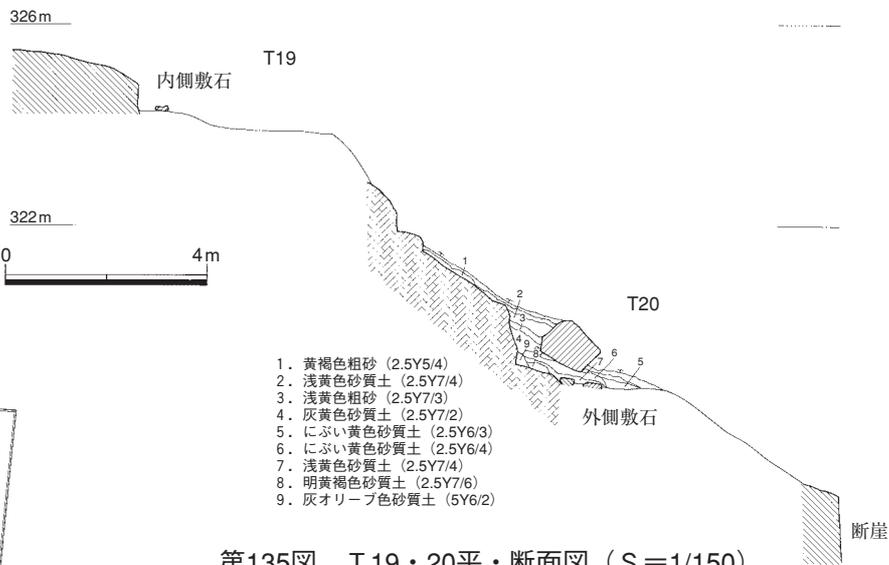
一方、傾斜変換線よりも城内側の地山は約7°前後の緩傾斜となっている。層序の概略は5～7層が層厚5～23cmを測り炭粒を多く包含し、3～4層は、層厚10～28cmを測り弥生後期の土器小片を含んでいた。3層の上面には尾根の地山頂部とほぼ同じレベルで削平を受け、幅5.4mもの平坦面が形成されている。従って、層位的に古相を示す3層以下の堆積は、尾根頂部の削平を伴う行為から免れた遺物包含層であり、地山で検出された遺構も当該期の所産と考えられる。

#### 土壙1

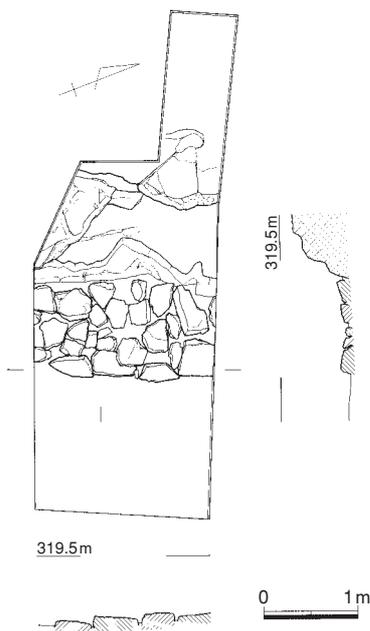
土壙1は不整形な円形を呈し長さ1.47m、深さ48cmを測る。10～12層の埋土は層厚5～15cmを測り、尾根の頂部からゆるやかに堆積しており、内部から壺(40)が出土した。

#### 土壙2

土壙2は楕円形状を呈し長さ約3m、深さ60cmを測る。底部は尾根の頂部側をゆるやかに削り込み底部は比較的平坦である。4の埋土は層厚10～20cmを測り、弥生後期の土器小片が出土した。



第135図 T19・20平・断面図 (S=1/150)



第136図 T20平・断面図 (S=1/80)



第111図版 T20の断面 (南から)

#### T19・T20（第135図参照）

T19からT24までのトレンチは第54壘状区間に位置する。当区間は尾根線よりも北東方向の斜面に4条の谷部を含む複雑かつ峻険な地形であり、急峻な斜面から途絶して断崖となる箇所も多数認められる。昭和53年の調査では城壁線の追求が困難を極め、第54壘状区間の設定に際しても「ここで仮に1区間と表現した範囲は少なくとも6単位以上になる予想が成り立つであろう。」と述べられ将来に課題を残している。そのため他の壘状区間より一際長い壘状区間に設定されており、T19～T24ではこうした不明箇所に対する確認調査を行う事にした。

城内の北西部には標高約372mを頂部とする尾根が東へ派生し先端部には、現在休憩舎が建てられている。また岩盤の露頭により断崖となる箇所もあり、傾斜変換線にそって幅2m程の遊歩道が通じている。踏査の際、崖面の基底からわずかに石材の並びを発見したため、T19を設定し直交方向にはT20を併設する事にした。

T19から検出された遺構は、内側列石と内側敷石、並びに下部の造成土である。内側列石と内側敷石は長さ約11mの範囲に残存しており、内側敷石には2カ所の「折」を確認した。以下の説明は「折」を境としてA～C区に分けて述べることにしたい。

A区では内側列石を4石検出した。石面幅86～98cmの石材を配置しつつ「折」となる接合部分に小型石材を使用している。内側列石の城内側には高さ約2.9mの断崖が切り立ち、その間わずか20～130cmの間に長さ5.7m以上に及ぶ内側敷石を直線的に配置していた。これらの遺構は地山上に1層（黄灰色砂質土）を造成後、内側列石と敷石を敷設しており、内側列石と敷石の比高差は16～20cm、A区とB区との内角は198°を測る。また、内側敷石と岩盤との間には約25cmの範囲に炭痕を検出している。

B・C区では内側列石が全て欠落し、崩落状態にある列石を2石検出した。一方、内側敷石はA区からB・C区へと連続し、城外側へ端部が揃っているため、かつては内側列石と接面していた状況が推定される。B区の内側敷石は長さ1mを測り、B区とC区との内角は190°である。

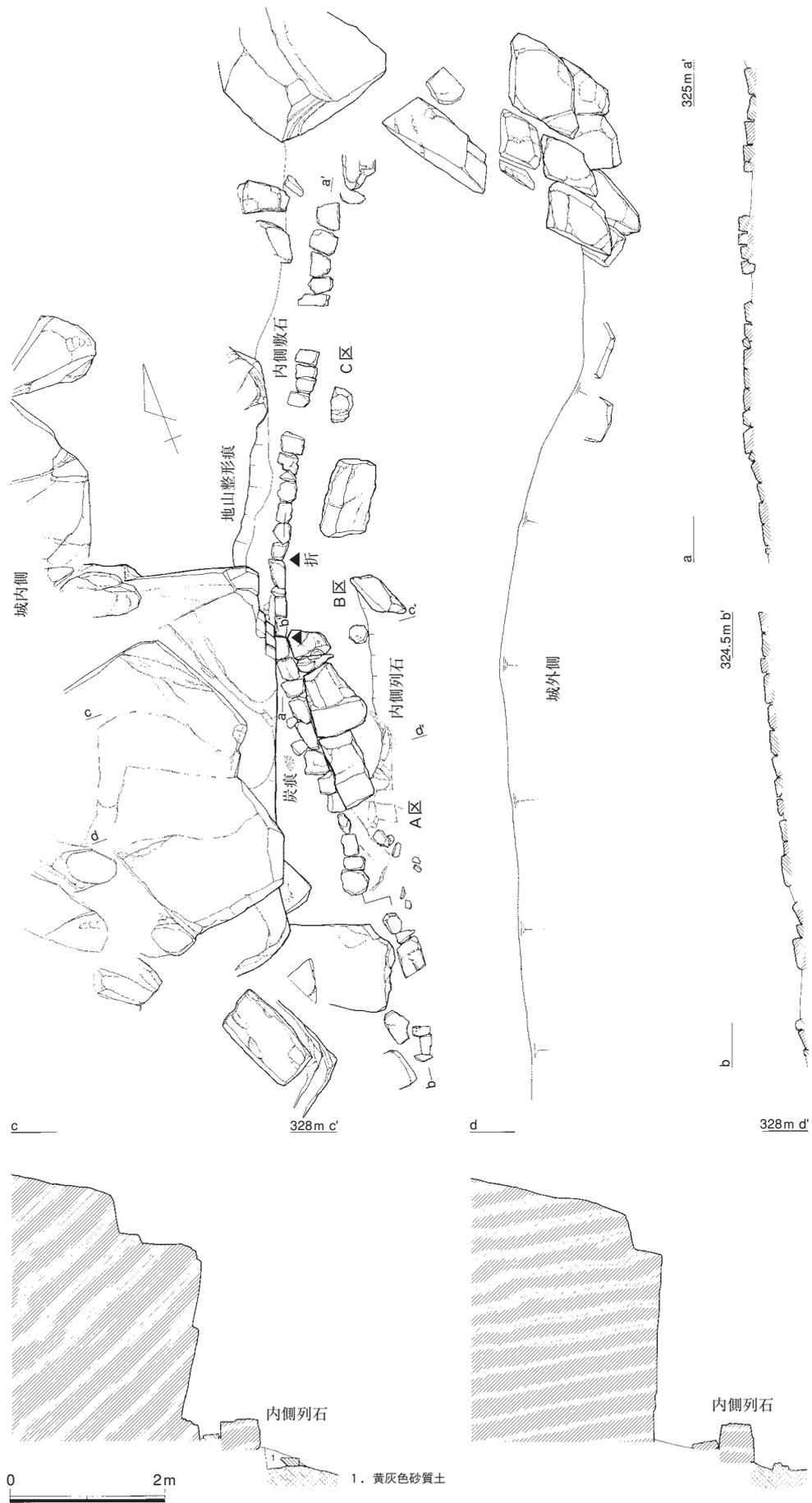
C区は長さ4.7m以上を測り、内側敷石の方向性からすれば頭部が岩盤に取り付くと考えられる。敷石より城内側には崖面を意識して地山整形痕が直線的に検出され、長さ2.6mに及んでいた。なお、A～C区までの内側列石（転石を含む）は7石を数え材質は全て花崗岩である。一方の内側敷石は40石を数え材質は花崗岩8、アプライト32である。

T20では外側敷石を検出した。傾斜変換線以下の地山は約36°以上の急勾配で、外側敷石と接する前端部には断面L字形の段が形成されていた。しかし完全には削平されておらず地山の高まりが残存する箇所もあり、人為的な削平は部分的に留まったと解釈できる。トレンチ周辺の地形にはこの段の法面と連続するかのように岩盤の壁面が露出し、ある程度の城壁線を反映しているため急崖における城壁構造が比較的把握しやすい。

削平段には外側列石は検出されず前端に外側敷石が敷設されていた。敷石幅は約1mを測り、端部を城外側に揃えており、敷石より上層に堆積した流土層からは崩壊流出した版築層などは検出されなかった。敷石の石材数は25石を数え材質は全て花崗岩である。

なおこの外側敷石より城外側には高さ1.3m以上もの断崖となり、局所的とは言え非常に険しい地形となっている。

上記の検出遺構から城壁の規模を計測すると、外側敷石から内側敷石までの幅は7.5m、高さ5.3mを測る。



第137图 T19平·断面图 (S=1/80)



第112図版 T20全景（北から）



第113図版 T20全景（東から）



第114図版 T20外側敷石（西から）



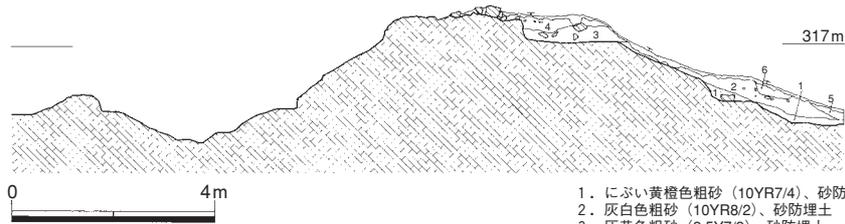
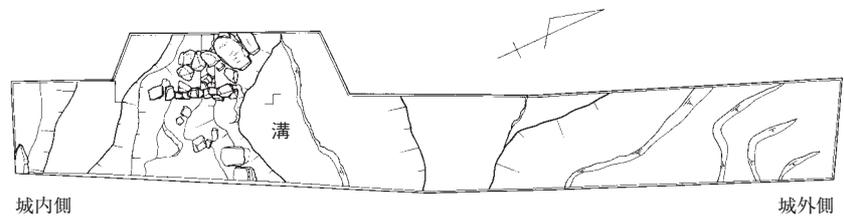
第115図版 T19内側敷石（北から）



第116図版 T19内側列石と敷石（南から）

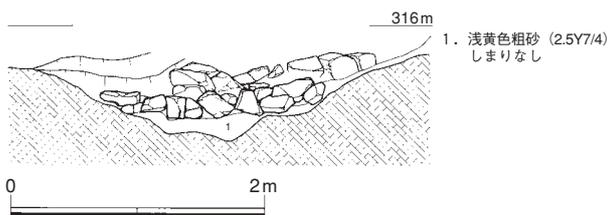
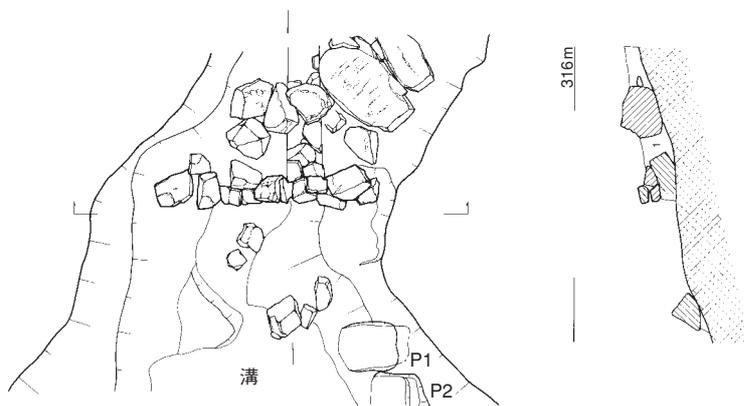


第117図版 T19内側列石と敷石（西から）



第138図 T21平・断面図 (S=1/150)

1. にぶい黄橙色粗砂 (10YR7/4)、砂防埋土
2. 灰白色粗砂 (10YR8/2)、砂防埋土
3. 灰黄色粗砂 (2.5Y7/2)、砂防埋土
4. 淡黄色粗砂 (2.5Y8/3)、砂防埋土
5. 浅黄橙色粗砂 (10YR8/3)、砂防埋土
6. 浅黄色粗砂 (2.5Y7/3)、砂防埋土



第139図 石垣平・断面図 (S=1/60)



第118図版 T21城外側より (南から)

### T21 (第138図参照)

T21とT22が位置する尾根は、T19の上位に位置する休憩舎から東南方向へと派生し、稜線上には長さ約60mにも及ぶ城壁状の高まりが確認できる。城内側には推測される城壁線と平行するかのよう  
に溝状遺構が断続的に観察されるため、遊歩道から望むと一見夾築式の城壁を思わせるが、地山が  
所々に露頭する箇所もあり自然地形を利用した城壁であることを予想させた。

T21は城壁線がT19・20の方向へ折れる状況を予想しつつ、残存良好な箇所を選択してトレンチを  
設定した。

遺構は自然地形による城壁と城内側に溝、石列などを検出した。城壁状の高まりには版築盛土等  
はなく全て地山が検出された。城外側の地山の傾斜は21°の勾配で谷頭に向かい急激に落ち込み、斜面  
には砂防段が幾重にも形成され、トレンチからも砂防段を検出した。

城内側からは城壁状の高まりと平行して溝が検出された。断面は緩いV字形を呈し、幅2.1~3.8m、  
深さ67cmを測る。既存の自然流路を利用しつつ人為的に開削した可能性もあり、自然地形による城壁

と溝が共存する状況が窺える。

溝の内部には軟質な1層上に石列が検出され、規模は長さ1.75m、高さ20cmを測り、石材には20cm前後の小石を多用していた。この石列より背面には長さ15～80cm程の石材が集積されており、平成11年度に実施した西門へ至る登城路の確認調査の際、検出した砂防石垣と状況が似ている。トレンチ周辺の地形には砂防段の形成が顕著である事と合わせ、検出された石列も同類の遺構と考えられよう。なお、溝の底部には隅丸方形を呈するP1・2が検出された。

以上の状況から稜線上の高まりは自然地形を利用した城壁と考えられ、規模は溝底部を基底として幅11m前後、高さ2.5mを測り、頂部には幅1.3～2.4mの平坦面が認められる。

#### T22（第140図参照）

T22はT21から約40m離れた同一の尾根上に位置する。トレンチ周辺の地形は尾根の屈折点でもあり、城内側には高さ1m以上の岩盤の壁面が露頭している。

遺構は自然地形による城壁が検出されたが、版築盛土などはなく全て地山である。城外側における地山の勾配は約26°を測り、緩斜面となる頂部付近には幅5.5m程度の平坦面が認められた。一方、城内側は岩盤の壁面となり溝状遺構との比高差は2.13mを測る。

以上の状況からT21と同じ自然地形を利用した城壁と考えられ、幅は9.5m程度が推測される。

#### T23（第141図参照）

T22から東南方向へ及び尾根は馬の背状に延び、頂部には長さ30m、幅20m程度の狭小な平坦面が認められる。この頂部には岡山県教育委員会の確認調査により鍛冶関連遺構が検出されており、城内施設を考える上で重要な遺構が発見された。

尾根の北東斜面には砂防段が顕著に認められ、かつての土砂流出の激しさを想起させると共に、遺構の残存が希薄であるように観察された。しかし、東門からT22の間が空白となるため、傾斜変換線を基点としてT23を設定し、城壁の連続を確認することにした。

調査の結果、城壁に関連する遺構・遺物は検出できなかった。層序の概要は7・8・12・13層が自然堆積層であり、1～6層、9～11層は砂防段の埋土である。また傾斜変換線より城内側の平坦部には下層である18～22層中に炭粒などを包含しているが、14～17層は多数の礫を含んだ流土層となり、上下層に大別することが可能である。

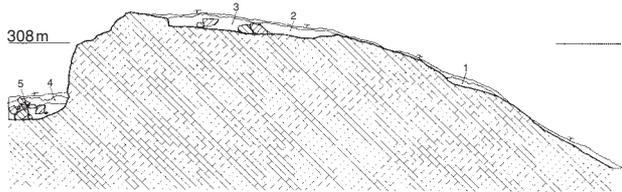
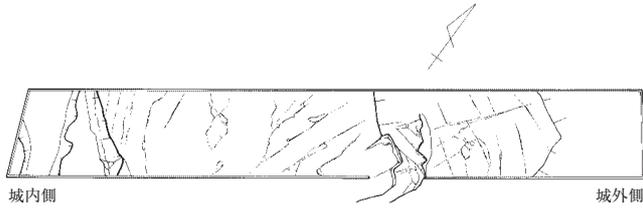
当該地に城壁が構築された確証を得るには至らなかったが、T23より以下の斜面は急崖になる事から城壁の位置もT22からさほど離れているとは考え難い。

#### T24（第142図参照）

T24は東門から北東方向に約30m離れた北斜面に位置する。外側列石は東門から第52壘状区間の頭部、そして第53壘状区間へと尾根の稜線を取り込むようにして配列されているが、第54壘状区間から不明となっている。そのため既存の列石線を手掛かりとして、第54壘状区間との接続関係を追求する事とし尾部付近へT24を設定した。

調査の結果、城壁に関連する遺構・遺物は検出されなかった。トレンチ下半の斜面には6段からなる砂防段が形成されており、削平は地山まで達していた。層序の概要は1～19層の全体に締まりがなく地山ブロック等を含んでいたため、ほとんどが砂防段の埋土と考えられる。

トレンチより下位は急崖となり崖面はT24からT23にかけて断続的に観察され、自然地形を取り込み城壁として活用したケースと推測される。

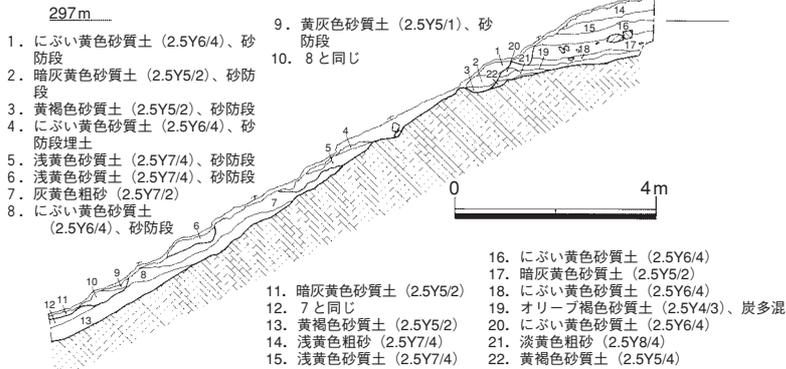
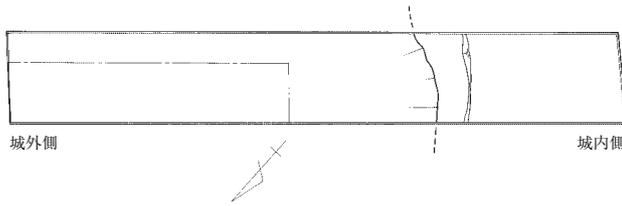


- 1. 浅黄色粗砂 (2.5Y7/4)
- 2. にぶい黄色粗砂 (2.5Y6/4)
- 3. 浅黄色砂礫土 (2.5Y7/3)
- 4. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/4)
- 5. 灰白色砂質土 (2.5Y8/4)、礫多

第140図 T22平・断面図 (S=1/150)



第119図版 T22城内側 (南から)

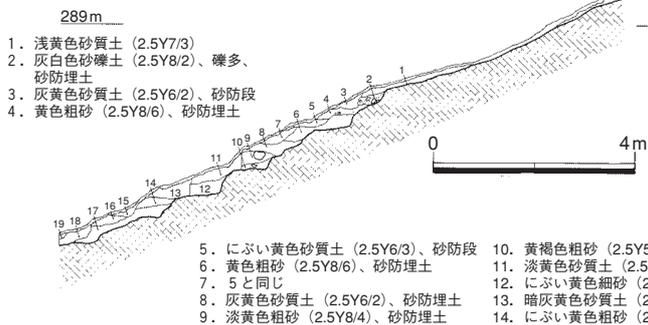


- 1. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4)、砂防段
- 2. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2)、砂防段
- 3. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/2)、砂防段
- 4. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4)、砂防段埋土
- 5. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/4)、砂防段
- 6. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/4)、砂防段
- 7. 灰黄色粗砂 (2.5Y7/2)
- 8. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4)、砂防段
- 9. 黄灰色砂質土 (2.5Y5/1)、砂防段
- 10. 8と同じ
- 11. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2)
- 12. 7と同じ
- 13. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/2)
- 14. 浅黄色粗砂 (2.5Y7/4)
- 15. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/4)
- 16. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4)
- 17. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2)
- 18. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4)
- 19. オリーブ褐色砂質土 (2.5Y4/3)、炭多混
- 20. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4)
- 21. 淡黄色粗砂 (2.5Y8/4)
- 22. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/4)

第141図 T23平・断面図 (S=1/150)



第120図版 T23全景 (北から)

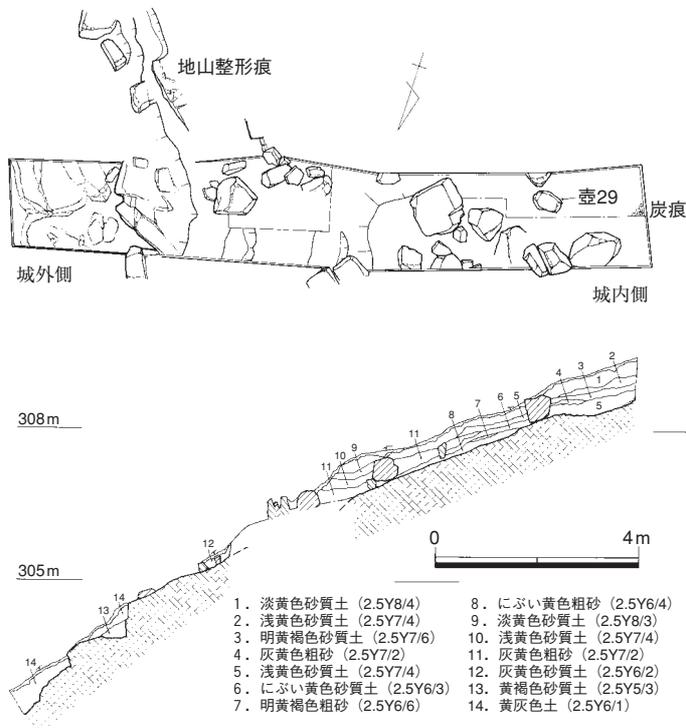


- 1. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/3)
- 2. 灰白色砂礫土 (2.5Y8/2)、礫多、砂防埋土
- 3. 灰黄色砂質土 (2.5Y6/2)、砂防段
- 4. 黄色粗砂 (2.5Y8/6)、砂防埋土
- 5. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3)、砂防段
- 6. 黄色粗砂 (2.5Y8/6)、砂防埋土
- 7. 5と同じ
- 8. 灰黄色砂質土 (2.5Y6/2)、砂防埋土
- 9. 淡黄色粗砂 (2.5Y8/4)、砂防埋土
- 10. 黄褐色粗砂 (2.5Y5/4)、砂防埋土
- 11. 淡黄色砂質土 (2.5Y7/4)、砂防埋土
- 12. にぶい黄色細砂 (2.5Y6/4)、砂防埋土
- 13. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2)、砂防段
- 14. にぶい黄色粗砂 (2.5Y6/4)、砂防埋土
- 15. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3)、砂防段
- 16. 淡黄色砂質土 (2.5Y7/4)、砂防埋土
- 17. にぶい黄色粗砂 (2.5Y6/4)、砂防埋土
- 18. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/3)、砂防段
- 19. 黄褐色粗砂 (2.5Y5/4)、砂防段

第142図 T24平・断面図 (S=1/150)



第121図版 T24全景 (北から)



第122図版 T25 (北東から)

第143図 T25平・断面図 (S=1/150)

なお、現在T24付近の第53塁状区間から山麓の阿弥陀原までは登山道が通じており、東門との位置関係からすれば登城道を踏襲している可能性がある。この第53塁状区間の外側列石は岩盤上に6石が配列されているが、後背には屹立した岩盤を控えており、いかなる形状の城壁を想定できるのか理解に苦しむ。しかし、かかる重要な位置に城壁の築造が未完であるとは考え難く、今の所以下の3案を提示しておきたい。

- ① T24の位置にはかつて版築土塁が築造され、現在はほとんどが流失した。
- ② 急崖を利用して何らかの遮蔽施設が存在した。
- ③ 自然地形をそのまま城壁の一部として活用していた。

T25 (第143図参照)

T25は第45塁状区間に位置する。第37～42塁状区間を形成する突出部から第4水門までの城壁線は中間地点である当区間で不鮮明となり、城壁を構成する各種の遺構が観察できない。しかし傾斜変換線よりも下位には推測される城壁線と平行して露岩が段状となり、外側列石と関連する遺構として昭和53年の調査時にも注意されている。そのため城壁の接続を確認する事としてT25を設定した。

遺構はトレンチの拡張区から地山整形痕が検出され、トレンチの上位より須恵器が一点出土した。傾斜変換線より以下の勾配は25°を測り、下位は段状となっているが人為的な痕跡ではない。

層序の概要は土質の状況から12～14層が新しい堆積であり、トレンチの上半に堆積した1～11層は多数の転石を含む流土層である。また、トレンチ上端の地山には炭痕の広がりが見出され、5層中から須恵器壺(29)が出土した。地山整形痕はトレンチ下半の拡張区から検出され、底部幅25cm、高さ28cmとわずかに段状となっているが、遺構の性格は明らかにし難い。

T25からは城壁と関連する遺構は検出されなかったが、第46塁状区間から第4水門までは土塁残痕の高まりが良好に残存しており、城壁線の方向性や突出部までの繋がりを推測すれば、当該箇所に版築土塁が築造された可能性は今なお捨て切れない。

## 第V章 平成15年度（2003）角楼から西門周辺の発掘調査

### 1. 調査の経緯

総社市教育委員会が鬼ノ城の整備に先立ち発掘調査を実施したのは、平成6年度であった。東門を皮切りに、角楼跡・西門跡・南門跡を相次いで発掘調査し、北門跡の所在も確認した。調査の結果は、各遺構の残存が極めて良好で、規模・構造の概要を把握するのに十分なものであった。

こうして城壁線については諸施設を含めて、昭和53年の学術調査と併せ、かなり具体的にイメージすることが可能となった。さらに平成11年度には、城内の確認調査が岡山県教育委員会によって実施され、新たな礎石建物跡や鍛冶場跡なども発見され、城内の遺構についても展望できるようになった。こうした発掘調査の成果を踏まえ整備の基本構想が具現化できるようになり、平成12年度には基本計画を策定した。

鬼ノ城の史跡整備事業は平成13年度から平成16年度の4カ年を第1期整備事業と位置付け、整備の対象となる角楼から第0水門周辺までを復元整備地区に設定している。整備事業に先行して平成14年度には高石垣から第0水門までの城壁上面に堆積している流土を全て撤去し、版築盛土からなる遺構面などを検出した。調査記録の作成後に整備事業へと移行し、石垣の一部解体と積み直しの後、第0水門周辺の城壁に版築土塁が復元されることになった。

しかし、復元整備地区の全体を俯瞰すると城壁上には流土がかなり残されており、整備工事へ移行するには速やかに流土を撤去する必要があるが生じた。こうした事態を踏まえ平成14年11月8日に開催された第17回鬼城山整備委員会では次の点を解消すべく論議され、平成15年度における発掘調査の方針が示された。

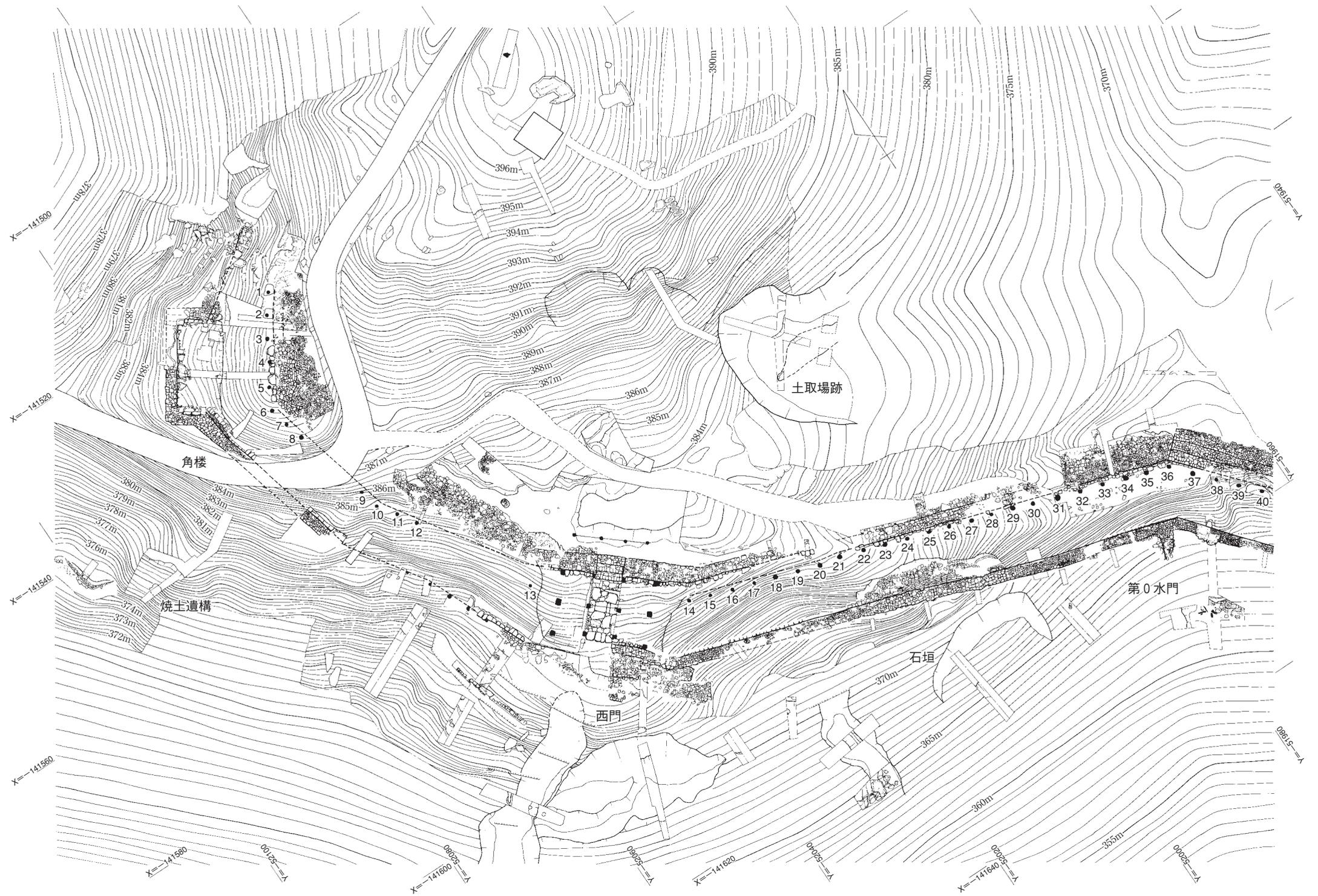
1. 作業仮設道を除く角楼から高石垣までに堆積している流土は、新たに復元する版築土塁の滑動原因となるため除去すること。そして、版築遺構面を検出し未解明部分の遺構を検出すること。
2. 角楼から西へ約250m離れた城外側の斜面には平成12年度の確認調査の際、焼土面を検出しているため、再調査を行うこと。

などである。また、復元整備地区の北端の取り付きが決定していないので、角楼の北東側を中心に調査を追加し、整備工事に備えることにした。これらの方針に基づき、整備に伴う事前の発掘調査を平成15年4月14日から8月6日までに実施し、約800㎡を調査対象とした。

一方、角楼の表示整備を実施するため、劣化やズレの著しい石垣は一部解体と積み直しを行い、立会調査を平成16年2月から3月にかけて実施した。そしてさらに、角楼背面に構築された石段の劣化が著しいため、損傷の程度により整備公開に耐えられない石材については、現地の石材を用いて取り替えた。

整備委員会は第18回整備委員会を平成15年4月24日、第19回整備委員会を9月27日、第20回整備委員会を平成16年2月26日に開催した。諸先生方には、ご多忙にもかかわらず現地での懇切丁寧なご指導ご助言をはじめ、西門、角楼の整備に際し多大なご支援をいただいた。

また、文化庁、岡山県教育委員会など関係機関各位からもご指導、ご助言をいただいた。銘記し深く感謝の意を表します。



第123図版 完成した西門（西から）



第124図版 復元された第0水門周辺の版築土塁（西から）



第125図版 復元された版築土塁と西門（東から）



第144図 角楼から第0水門周辺の遺構平面図 (S=1/600)